

フォレソビ（6,645m）北壁登攀

山 本 大 貴（関西学院大学山岳会）

はじめに

2023年にヘリでのレスキューによって、かろうじて次のチャンスを残していた私たちは、翌年2024年にまた同じ計画で戻ってきた。メンバーも同じく種石と2人。うまく山頂へ辿り着けなかった原因であろう点を洗い出し、それを改善するべく色々な面で対策を施した。



Pholeと登攀ライン

今回は、天候の周期も私たちの日程に味方してくれ、懸念だった体調もすこぶるよく、初登頂のおまけ付きで、狙ったラインから山頂を踏むことができた。

本文では24年のクライミングの日程や装備などをテーマとした。

登山概要

私たちの選択基準であった未踏の壁、6,000～7,000m代、見た目がカッコいい壁の諸条件を満たしたPholesobi（フォレソビ、以下フォレ）は、ネパール／カンチェンジュンガエリア、ジャヌーと同じ稜線上、西側に位置し、トレッキング街道沿いの村Kambachen（ガンバチェン）から望める場所にある。

Gunsa村を含めたこの界限では、Jannuから西側に伸びた稜線上の3座（Jannu、Pholesobi、Ghabur）を神々が宿る山として崇められている。ここGunsa在住のDzonga村長曰く、地元の方々はファラーと呼称するらしい。

私たちは、2024年10月25日に、この村長にKambachenへ来ていただき、プジャ（御祈りの儀式）をあげてもらった後、BCを出発。BC戻りが11月2日、計9日間のトリップとなった。

東西に伸びる稜線上にこの双耳峰のフォレ山頂があり、私たちは10月31日に北西壁から北壁へ回り込む形でクライミングを続け、山頂に到達することができた。アプローチは、北側にあるジャヌー氷河から近づき、フォレとその西隣にあるGhaburの間の

氷河から北西壁の取り付けへ歩みを進める。

壁は5,150mから始まり、5,250mから標高差1,400mのクライミング開始。傾斜が強く、同時登攀ではなく、全てピッチクライミング、下降は同ルート下降とした。

初めてのトライ

2023年、双耳峰フォレ6,645mをアルパインスタイルで目指す計画だった。今回ベースとしたKambachen村から近接するこの山は、不思議と未踏峰のまま残っており、トライした記録も見当たらない。私たちは、モンスーン明けと同時にキャラバンのスタートを目論み、10月11日に出国した。期間は11月19日までの42日間、ベースキャンプ滞在が30日弱となる予定である。別の山で高所順化登山の後に、北西壁基部のABCから4泊5日、可能性があれば双耳峰を縦走するタクティクスで装備を国内で準備した。

ゴーアップ後、ABCから4日目5,200m、悪化し続ける体調での、先の行動に不安を感じ、迷いながらも下降を決断した。C3の懸垂氷河上の台地に戻り、倒れ込む様に眠りにつく私をよそに、その夜、冷静なパートナー／種石はヘリでのレスキューを検討し始める。

冷静になって考えてみれば、体調的には、2日目の夕方から違和感を感じていた。初日の辛い一夜を過ごしたため、単純に寝不足により疲労が溜まったのだと考えた。C3の完全に横になれる快適な一夜の翌日4日目、この朝も前日と比較し、体調の悪化は感じられず、続行を決めるも、3ピッチ登った所で下降を決断。その後に続くトラバース、ルンゼ地形、お座りビバークなど耐えたとしても登高スピードはあがらず、下降に大いに不安があった。症状としては、呼吸が苦しく、集中力が続かない。少し動いただけで、息切れが激しく、運動機能が著しく低下。

この時には、鼻水や痰の全てが赤く染まっていた。血が混じっているというより、血そのものや血の塊だった。テントに潜り込むと、着の身着のまま眠りについた。翌日レスキューヘリが飛来し、お昼前にピックアップ。ルクラなどを経て、カトマンズ空港、病院へと直行した。入院生活を1度繰り返し、都合7日間、初めての入院生活を体験した。

行動概要 詳細

出国からBC到着まで

BC（Kambachen）まで出国日を1日目とすると、8日目に到着した。2023年の時も同様で、BC4,100mへの移動が非常にスムーズだったと言える。カンチェンジュンガエリアはネパールの東の端、そのため移動距離は長い。2回目となる24年の大きな違いは、Bhadrapurまで飛行機で飛んだことになる。23年のマイクロバス移動の場合、ノンストップで24時間の移動となり、道路事情も悪いため、疲弊してしまった。前述した通り、コストもそう大きな違いはなく、全体を見ると、そう大きな移動時間の短縮とはならないが、体力的xコスト感で非常にお得な選択だと言える。

2024は出国した日の夜にカトマンズに到着予定であったが、なぜか搭乗予定の朝便がフライトキャンセルとなり、午後便になってしまった。そのためカトマンズ翌朝着となり、デリー空港で夜を過ごす羽目となる。ただし、航空会社Air Indiaは、受託手荷物を23kgを2ヶまで預けることができる。

カンチェンジュンガエリアの起点となるTapplejungは、標高1,800mほどの比較的大きな街である。ここで車を乗り換え、川岸のダート道を4-5時間進めば、ポツンと1軒のロッジが佇むSekathumに到着する。

翌日は、キャラバンで最も長い道のりとなる。途

3. 海外登山記録

中のAmjiloshaで泊まることもできるが、標高も低く体への負荷も少ないため、もう一つ先の村を目指すことにした。標高3,000m程くれば、植生も変化し、ジメツとした湿度からも解放され、気持ちの良いトレイルを進むことができる。残りの2日間はゆっくり歩いて4時間ほどの距離となり、Gunsaではカフェラテや自家製のケーキを食すこともできる贅沢なロッジを利用した。ケーキはヤクチーズケーキやキャラットケーキ、ブラウニーまで用意され、客室には中にトイレがあるほど、こだわりのある造りとなっている。それもそのはず、この辺りを牛耳るDzongaファミリーの長男が経営するロッジであった。

その先のKambachenにはDzonga弟が切り盛りするロッジがある。ここではシンガポール留学で学んだピザを食すことができた。2023年と同様2階の部屋を1ヶ月貸切、なんと1泊500Rs./部屋で泊まることができた。登山期間（食事を取らない）も僕たちは部屋を借り続けることにし、その時は1泊1200Rs./部屋で清算した。食事代の相場としては、隣のロッジより若干高く、ダルバード850Rs. ボロネーゼパスタ850Rs. であった。この価格も2023年と比

較すると150Rs. 値上がりしておりインフレの煽りを受けてしまった。

BC～順化登山まで

2024年は、2回の順化登山を行った。これは1回目の順化登山が、選択した山を間違え、5,600m以上に高度を上げることが出来なかった失敗から2回目を実施することに至ったが、非常に有用だと感じたので、改めて振り返ろうと思う。

実際、ゴーアップ時、壁の中での呼吸の上がり具合や食欲、睡眠など体の調子は、これまでと比較して最も良く、頭痛を感じたのも1夜限りであった。順化登山を2回する事は、欧米のクライマーの中では一般的かどうか分からないが、隣にいた2023年のジャヌー隊、ジャヌーウエスト隊、2024年のジャヌーウエスト2隊が実施していた。彼らが2回行っていた事を知ってはいたが、7,500m近い山にトライするからだろうとそれまでは考えていた。

2回実施することのデメリットとしてBC入りから順化完了までの日数が最低3、4日増えるが、それに見合うメリットが感じられた。何より1回の順化

登山で2泊または3泊分の装備しか持たないので、とても身軽である。それに今回選択した山/MERAは南面となり日照時間も長く、暖かい。そのため、積雪量も少なく、移動の多くは雪のないトレイルを歩くことができた。2回目では、6,100mで2泊したが、前年の日本茶しか口にできない

	2023		2024	
1	翌00:20 フライト 行:バンコク 航空会社: Thai Airways		13:50 フライト 行: デリー 航空会社: Air India	
2	12:30 着: Kathmandu 午後: ブリーフィング		10:00 着: Kathmandu	
3	準備		準備	
4	07:00 マイクロバス 行: Taplejung		07:40 フライト 行: Bhadrapur 21:00 ジープ 着: Taplejung	
5	06:00 着: Taplejung 12:00 ジープ 着: Sekathum	1,570m	12:00 ジープ 着: Sekathum 16:30 歩き 着: Itahari	1,760m
6	16:00 歩き 着: Gyabra	2,700m	15:00 歩き 着: Gyabra	2,700m
7	13:30 歩き 着: Gunsa	3,400m	11:30 歩き 着: Gunsa	3,400m
8	13:00 歩き 着: Kambachen	4,100m	11:30 歩き 着: Kambachen	4,100m

日数	2023	宿泊標高	2024	宿泊標高
0	BC_休養	4,100m	BC_休養	4,100m
1	順化 day1	5,050m	順化① day1	4,750m
2	順化 day2	5,430m	順化① day2	5,400m
3	順化 day3	6,000m	順化① day3	4,100m
4	順化 day4	6,000m	BC_休養	4,100m
5	順化 day5	4,100m	BC_休養	4,100m
6	BC_休養	4,100m	順化② day1	5,350m
7	BC_休養	4,100m	順化② day2	6,100m
8	ABCへ荷上げ	4,100m	順化② day3	6,100m
9	BC_休養	4,100m	順化② day4	4,100m

ような体調の悪さは感じられず、1回BCで休養を挟んでいることから、体が高所に順化できている実感を感じた。BCから山へ向かうことが2回となり、その点は億劫であるが、1回あたりの背負う荷物量が少ないこともあり、順化後の疲労感では圧倒的に差を感じた。

場所柄、6,000mへ到達しやすかったため、順化登山を2回に分けて行えたが、エリアや順化できる山の積雪状態など、状況によってアレンジは必要である。

ゴーアップ

概要

2023年の反省も踏まえ、壁に取り付く前にABCにて半休養日を設ける事とした。BCと壁の取り付きの標高差は約1,200m、移動は丸1日を要する。1日で移動する標高差としては1,000mを超え、且つ、BC→ABCは20kgを超える重量かつ8時間以上の歩行が入るため、疲労度も高い。そのため、2023年は健康状態の限界点を超えてしまい、再発に至ったのではと考えた。そこで、このABCでもう1泊挟む

ことで、初日に休養と高度順化、下部ロープフィックスも兼ねられる算段であった。

実際には、BCを出発した日は、明るいうちに5050mまでしか到達できなかったが、ゴーアップに向けて、ゆっくりと睡眠をとることができた。

また登攀タクティクスは、1日ごとにリードは交代。フォローはユマールとした。

10/25) BC～ABC/5,050m

朝、プジャの後に、20kgほどのギアとともに出発する。ガイドのプラカソもジャヌー氷河を渡った先までギアのボッカなどを手伝ってくれた。そこから氷河の脇の岩壁帯を縫うようにして登り進んでいく。昨年のケルンや赤旗などがまだ残っていた。ギアが昨年以上に重いこともあって、予定より100mほど低いところをABCとした。



ABCへ大量のギアと共に向かう

3. 海外登山記録

10/26) 0日目 ABC->取付->3P->ABC

本日は下部をロープ3本分FIXする。5:00起床にて、ゆっくりと準備し取り付けへ向かう。心配していた昨年とのコンディションの違いは、幸いなことに許容範囲。少し雪の付着が増え、岩への支点が取りづらくなっていただけであった。この日は種石リードのため、私は競うことなく、この場所、景色を楽しむことができた。午後には日もあたり、のんびりした日を過ごすことができた。3Pとは言っても、帰幕は16:30と遅くなってしまった。

10/27) 1日目 ->C1/5,750m

いよいよ壁の中に入っていく時がきた。緊張感も増し、まだ暗い中、取り付けを目指して出発する1時起きの3:30出発。前日のFIXを登り返し、クライミングを開始する頃になって明るくなってきた。ここから3日間ほどは前回と同じラインを辿るのだが、中途半端に岩に付着した雪が柔らかいままで、フットスタンスとしても使えず、岩の支点探しに苦労した。ピッチを上げる毎に付着する雪も減り、この日6Pの登攀を終えた辺りに上部が切り立った場所にぶつかった。Podを張る条件として、傾斜の強さがある。そのため傾斜の強い岩の下は、上部からのスノーシャワーを防げることも加味し、場所を決めたのだが夜中にあんな目にあうとは思ってもよらなかった。

初めてのスノーコンディションでのPodは、想定した通りの快適さを備えていた。設置場所のアイスのカッティングは少しでよく、左右に動くための支点とギアの準備のためのスペースさえ設けられれば、あとはポーターレッジの上で快適に過ごすことができた。

ただ選んだフライのサイズが微妙に足りないことが気掛かりであった。。。

10/28) 2日目 ->C2/5,900m

朝からお互いにテンションが物凄く低い。短すぎたシェルターのおかげで、Podとシェルターの間に隙間が出来てしまい、上部からのスノーシャワーの内部へ侵入を許してしまった。今回使用したPodは、1.5人用サイズと通常の1人用と違いサイズが大きい。私たちが選んだシェルター（フライ）は、1人用。BCのロッジで垂直の環境下であれば余裕があったシェルターの長さも、傾斜が落ちた壁では足りなくなるらしい。特に外側にいた種石の被害は大きく、融雪した水で靴下が濡れただけでなく、不快な一夜を過ごしたらしい。朝の準備も時間がかかってしまい、ゆっくりと登りはじめた。

Podの張り方、場所を明るいうちに構築するため、相応にクライミングを切り上げ、設営に入った。

10/29) 3日目 ->C3/6,200m

設営のコツを掴んできたらしい。少しは快適な一夜を過ごすことができ、7時に出発。この日は下部岩壁から上部岩壁へ回り込み、上部のルートが見える位置まで行きたかった。山頂までのラインを探り、山頂へ至れる可能性を少しでも確実なものにしたいと、急いだクライミングとなった。この上部と下部をつなぐセクションは、傾斜も少し落ち、アイスセクションとなる。難しくはないが、同時登攀は難しく、リスクがあるくらいの傾斜が300mはあり、パンプに耐える1日であった。8P終了点から、上部へもう1P伸ばしにかかったが、幕営適地が見つけれられず、Fixして戻って幕営となった。設営の要領もだいぶ心得てきており、日に日にスムーズに作業ができる。

10/30) 4日目 ->C4/6,350m

傾斜の落ちたアイスから始まり、岩壁に走ったべ

ルクララインを登攀。少々プアな支点でのトラバースはヒヤヒヤしたもの、種石が粘り強くロープを伸ばして行った。

遠くから見ると、壁の上部となる北面にはアレートが山頂まで続いていることが確認できていた。出だしはそれを分かつように左右に並んだアイスセクション。傾斜はルート上もっとも強そうに見えており、懸念のピッチであった。近づいていくと左右をつなぐバイパスの役割をした右上ルンゼラインを発見。これによって、うまく傾斜を落としたラインかつ、私たちの意図するアレートの右側へ出ることができた。16時にはクライミングを終え、翌日の山頂往復を控え、早々にPodの中へ入ることとした。



5日目 山頂へ突き上げるアレート右側のライン

10/31) 5日目 ->山頂6,650m->C4

頂上稜線へは、アレートの右側がルンゼ地形っぽく、白いモノが頂上直下へ続いていることが遠目に見えていた。最短距離かつ合理的なライン。ダメな



頂上稜線へ雪庇を切り崩して達する

ら、右の北西面へ150m以上トラバースが必要なことも視野に入っていた。まだ当然暗い3時起床、C4から山頂往復を予定に出発。まずは1ピッチ、傾斜は強くプアなアイスを繋いだ右上ライン。支点構築に時間は掛かるも、1段傾斜の落ちた箇所には到達できた。ここからは、頂上稜線まで綺麗に見渡せた。懸念のルンゼ地形は、見紛う事なく一直線に伸びていた。これで不要なトラバースを行う事なく、頂上へ達する算段が経ち、二人で色めき立つ。あとは、70度のアイスから80度近いミックス、80度近いアイス、そして最後にシュガースノーの雪壁のおまけ付き、計8Pで稜線に達した。稜線から頂上へは30m、素晴らしい場所に出れたものだ。反対側には、90度近い傾斜のジャヌー北壁が聳え立っていた。ロープを備えたまま頂上を踏み、軽く記念撮影。日暮れが近い、早々に懸垂下降を開始する。稜線反対側に、スタッフサックを埋



夕日をバックに山頂で喜ぶ種石

3. 海外登山記録

めてアンカーとし、1人目はアックスビレーでローダウン。2人目は懸垂下降をロープにセットした上でクライムダウン。残りの7Pはアイスや岩などを支点に、暗い中ラッペルを繰り返し、20:30にC4到着。登頂の喜びもあり、日頃の疲れも癒すため、翌日の起床を少し遅くすることにした。



聳え立つジャヌー北壁

11/01) 6日目 ->ABC

5時起きの9時出発。足場の不安定さもあって、少々片付けに時間を要してしまった。この日中にABCまで帰り、ハーネスを外した状態で横になった。ラッペルを開始して、16回あたりで暗くなってきた。それまでは硬いアイスでアバラコフによって強固なアンカーを設置できていたが、下部に移るにつれ、少々水氷っぽく、氷に粘度を帯び始める。荷

重テストを繰り返すと当然、アバラコフが崩壊してしまった。それ以降、氷を掘り起こし岩メインでアンカーを構築。トライカムやピトンの残り数が無くなり始めた19:30頃、ようやくハーネスを外せる場所まで到着。およそ22回のラッペルで氷河上に降り立った。初日に投げ捨てたフィックスロープも無事に回収し、ABCへ21時に到達。登りきった達成感と無事の下山の安堵感に包まれたまま、テントの中では時間を忘れ、日が変わってから就寝した。

11/02) 7日目 ->BC

もう登る必要はなく、プレッシャーから解放された朝、のんびりと朝食を取る。残っているものは100g程度のアルファ米とふりかけ少々、コーヒーのみ。それを2人で分け合い、澄み渡った空模様に相応しい心持ちで下山した。ジャヌー氷河へ降り始めるタイミングで、ガイドのプラカシュのお出迎え。ランチボックスまで用意してくれており、お腹も満たすことができた。少しとは言えない程のギアも持ってもらい、BCへ向かう。もう終わってしまう寂しさはあったが、昨年からの心残りであったこの登山を無事に終えられ、清々しい1日であった。

BC->カトマンズ

BCに到着し中1日で、まだ疲れが癒えない中、カトマンズに向けて出発する。手配したポーターは4人、お昼の到着を待ち、昼食を済ませてからGunsaへ向かった。この日は朝から曇り空、雪や雨が舞う時間帯があった。クライミングで疲れた体には、下山といえど硬いトレイルを長距離歩くことは相当辛かった。バックキャラバンでも飛行機を利用し、4日目(11/07)夕方にカトマンズへ到着。

装備／食料の情報 など 装備

特筆すべきは、ポーターレッジ。前回の経験から最も懸念であった寝る場所を確保するために、Grade VII社の超軽量なポーターレッジ：PODを持参した。



成功の立役者 ポーターレッジ

クライミングギア

クライミングロープ(シングル9.1mm)60m x 1本
セミスタティックロープ6mm 60mm x 2本

(うち1本は壁基部にFIXし、登り返し後、下に落とした)

捨て縄6mm 約20mm

カム1set #0.1-#2

ナッツ 1set

トライカム 6ケ

ピトン&アングル 7ケ

アイスクリュー 11本(22 x 1, 16 x 3, 13 x 7)

クイックドロワー17cm x 3本

スリング 120cm x 4, 60cm x 7, 30cm x 2

HMSカラビナ x 2 (固定分散とマスターポイント構築用)

カラビナ 多数

アセッション x 2 (左右各1)

フットコード

ビレイシート

生活装備

POD 1.5 (1.5人用サイズ)

シェルター

スリーピングバッグ x 1 (2人半身用)

ジェットボイル(ミニモ), ハンギングキット

ガスカートリッジ x 2 (500, 250 各1本)

* 壁の中5泊をガス重量550-600g ほどで足りた。

* 上記以外に、ABC 滞在用にテントやエアマット、ガスカートリッジ、シュラフなどがある。

食料

アタックと高度順化で食べるものは全て日本から持参した。唯一、順化中の行動食はネパールで購入したスナック類とした。

壁の中には4泊分の食料と、アルファ米100g。最大6泊は食べ延ばしできるように考えた。

朝：アルファ米100g, お茶漬け、ふりかけ、スープ、コーヒーなど

行動食：1日平均200g強/人 (各自用意)、アクエリアス粉

夜：マウンテンハウス、スープ、コーヒーなど

* マウンテンハウスは2023年の残り。アルファ米の方が味付けも好み。

会計

\$1=約¥146での計算となる。[登山料ほか]はエージェントへの支払いで、登山料からリエゾンオフィサー代などが含まれる。[BCロッジ/食事代]はガイド1名分も含まれる。私たちは食事代を含め、1人あたり平均してRs4,000-/泊掛かっていた。キャラバンをスタートした村と比べて2倍強となっている。[キャラバン費用]はネパール東部への飛行機代往復(約¥11万)、車チャーター(約¥14万)、ポーター代(約¥11万)などがある。

航空券代	¥216,280
登山料ほか	¥1,123,500
国内費用	¥50,000
BCロッジ/食事代	¥190,762
キャラバン費用	¥467,788
カトマンズ滞在費	¥13,712
その他	¥98,590
合計	¥2,160,633

* 本遠征登山は、日本山岳スポーツクライミング協会より海外登山奨励金の助成を受けました。